漱石覚え書

柴田宵曲

漱石覚え書

江戸の名残

幼時の漱石に鎧を著、太刀を佩き、采配を持った写真があって、「漱石写真帖」に収められて居るが、紅葉にも萌黄縮緬の裾に金糸で浪と鯉を現し、背中にも大きく番鷹の羽の定紋を縫箔した陣羽織を著し、紺緞子の裁著袴を穿いた時代があるそうだ。二人とも慶応三年生れだから、江戸の名残がこんなところに存して居っても、別に不思議はあるまい。漱石のこの珍写真は落合直文の遺

族の秘蔵するところとあるが、どうしてこれが落合家に在るのか、「漱石写真帖」にも説明がなかった。

書簡の年代

「漱石全集」の書簡は明治二十二年のものが最も古い。然るに「寺田寅彦全集」には明治十七年及十九年の書簡がある。親兄弟に宛てた書簡だから、古いものがあったところで不思議は無いが、寅彦が漱石の弟子で、十歳も年少であることを考えると、ちょっと妙な感じがする。

古人の場合なら一種の錯覚を生じそうなところである。

「明治豪傑譚」

明治二十四年十月に出た「明治豪傑譚」という書物がある。「読売新聞」所載の逸話を集めたもので、後年「冒険世界」あたりに出た話の中には、大分これに拠ったものがある。序文に明治辛卯十月、破天荒斎とあるのは、松平康国であろう。これだけでは特に取上げるほどの価値もないが、面白いことにはこの書物の出版された当時、

正岡子規がこれを夏目漱石に贈り、漱石が長文の書簡でそれに対する意見を述べている事実がある。漱石曰く「小生元来大兄を以て吾が朋友中一見識を有し、自己の定見に由って人生の航路に舵をとるものと信じ居候、其信じきりたる朋友がかかる小供だましの小冊子を以て気節の手本にせよとてわざ〳〵恵投せられたるはつや〳〵其意を得ず」と。子規の事だから何か反駁の書簡があったろうと思うが、その方は伝わっていない。

時代的相違

漱石の学生時代に親友の中村是公がボートレース選手になって勝った。学校から若干の金をくれて、その金で書籍を買い、それに某教授がこれこれの記念に贈るという文句を書添えるとなった時、是公が俺は書物なんか要らぬ、何でも貴様の好きなものを買ってやると云って、アーノルドの論文とハムレットとを買ってくれた。漱石は生涯その本を持って居ったらしい。

芥川龍之介は大学二年の時、独逸語の出来がよかったので、独逸大使グラアフ・レックスからアルントの詩集

を四冊貰った。このアルントは郁文堂に沽却して金六円に換えてしまったので、アルントに就いては何も知らぬと云っている。僅にこの二つの事実だけを見ても、明治と大正との時代的相違が、今更の如く感ぜられる。

絵端書

「漱石写真帖」に山川信次郎撮影の「午睡の漱石」というのがある。明治三十一年、熊本時代のものである。これと何方が先か知らぬが、夏休みで帰省中の寺田寅彦に

よこした端書に、脚を投げ出して仰向に昼寝している人の姿を簡単な墨絵に描き、狸のような顔にはぴんとした髭が生えて居り、何とかで「狸の昼寝かな」という句が題してあったそうである。この端書は紛失したと見えて、全集に載って居らず、従って句の上半もわからない。

後年どこからか少し入った原稿料で水彩絵具やスケッチ帖を買い、その絵具で絵端書をかいては親しい人に贈った。「猫」以後は橋口五葉、大塚楠緒子というような人達との交換もあって、一時は大分熱心であった。併し絵端書としては狸の昼寝が古い方であろう。伝わらぬの

が残念である。

反故にした作

明治三十九年二月、森田草平に宛てた漱石の手紙に、「僕が二十三四にかきかけた小説が十五六枚残つて居た。読んで見ると馬鹿気てまづいものだ。あまり恥かしいから先達て妻に命じて反古にして仕舞つた」とある。二十三四といえば明治二十四五年、正岡子規が「月の都」を懐にして露伴を訪ねたりした時分であろう。「吾輩は猫

である」を執筆する十何年前だから、果してどんなものであったか。もしこの時破棄せずに筐底に存していたら、初期の文章俳句と一緒に全集に取入れられるところだったに相違ない。惜しいようでもあるが、漱石としては不愉快だろうと思う。

蔵書印

漱石は熊本時代に「漾虚碧堂図書」という石印を作らせた。「漾虚碧堂とは虚子と碧梧桐を合はした様な堂号

なれど是は春山畳乱青春水漾虚碧と申す何より取りたるものに候」と正岡子規宛の書簡にある。刻者は伊底居士という人であった。後の「漾虚集」などという書名も、この堂号より出たものであることは言を俟たぬ。

大きな「漱石山房」の印は、誰の刻か知らぬが、明治四十年三月四日、小宮豊隆宛の端書にこの印を捺し、「漱石山房の印をペタ〳〵押したいが時々来て五六冊づつ押して被下度候」とあるから、この時分に出来たものかと思う。併し同じ年の七月二十一日、鈴木三重吉宛の端書には「漱石山房といふ印が俗でいやになつた、ひまが出

来たら一人でもつとうまい奴を刻つてやる」とあるのを見れば、あまり気に入らなかったのであろう。この自刻の印は遂に出来なかったらしい。

弓

弓の話によく出るのは紅葉山人だが、これは「数ある道楽中の堂は入つたもの」と巌谷小波が云っているから、相当の伎倆があったと認めてよかろう。高山樗牛なども力があったらしく、七分ぐらいの強弓を引いたそうであ

る。漱石も松山時代には弓を引いていた。明治四十年七月の高浜虚子宛書簡に「私が弓をひいた垜がまだあるのを聞いて今昔の感に堪へん。何だかもう一遍行きたい気がする」とある。十年以上前の垜(あずち)がそのままあるとしたら、成程今昔の感に堪えぬであろう。尤も松山に行く以前、二十七年の句に「大弓やひらり〳〵と梅の花」「弦音にほたりと落る椿かな」「弦音の只聞ゆなり梅の中」などというのがあるのを見れば、東京にいる時分から已にやっていたものと思われる。

エイルイン

オッツ・ダントンの「エイルイン」は往年英国の紙価を高からしめた小説である。当時熊本に在った漱石が、この書物を註文したときは、二三版の頃であったのに、手元へ届いたのは十三版になって居たそうだ。この小説の梗概を日本に紹介したのはむろん漱石で、明治三十二年八月の「ホトトギス」に発表された。然るにこれが戸川秋骨によって翻訳されたのは大正四年だから、漱石の紹介以後十五六年経過して居る勘定である。漱石がダントンに就いて「別段有名な人でもない」といい、秋骨が

「著者は永い間イギリス文壇の重鎮であつた」という相違は、当然この歳月の経過から生れたものであろう。但し秋骨の翻訳の序文には、「エイルイン」幷にダントンに関し、随分いろいろな事が述べてあるに拘らず、往年の売行の事や、漱石の紹介の事に一言も触れてないのが物足らぬ。

自転車

漱石の俳体詩に

朝顔や売れ残りたるホトトギス
尻をからげて自転車に乗る

とある。この自転車に乗る者は即ち「ホトトギス」の主人公たる高浜虚子なので、明治三十七八年頃に於ける自転車の流行が那辺にまで及んだかを察することが出来る。泉鏡花が「紅雪録」「続紅雪録」を書いている時分、春陽堂から自転車で催促に来る。二番手、三番手、四番手と続々やって来るので大いに狼狽したら、実は自転車の買いたてで、店の者が催促旁々の練習だったというのも同じ頃の話である。後になると何でも一応話題になる

価値があるらしい。

倫敦の日本人

正岡子規が「墨汁一滴」の中で「漱石が倫敦の場末の下宿屋にくすぶつてゐると、下宿の上さんが、お前トンネルといふ字を知つてるかだの、ストロー（藁）といふ字の意味を知つてるか、などと問はれるので、さすがの文学士も返答に困るさうだ。この頃伯林の灌仏会に滔々として独逸語で演説した文学士なんかにくらべると、倫

敦の日本人は余ほど不景気と見える」といったのは「倫敦消息」によったのであるが、当の漱石はその後「吾輩は猫である」中巻の序でこの事に触れ、「子規はにくい男である。嘗て墨汁一滴か何かの中に、独乙では姉崎や藤代が独乙語で演説をして大喝采を博してゐるのに漱石は倫敦の片田舎の下宿に燻つて、婆さんからいぢめられてゐるといふやうな事をかいた」と述べている。伯林の文学士の何人であるかはこれで明瞭だが、同じ序文の中に「墨汁一滴のうちで暗に余を激励した故人」とあるのを読めば、子規の意の存するところはよく通じていたの

である。

「墨汁一滴」の連載された明治三十四年の「日本」（十一月五日）に「余霞散綺」という欄があって、「赤門出身の文学を修るものにして研究に誠実なるもの独逸文学に藤代禎輔氏あり、英文学に夏目金之助氏ありと聞く、他猶之あらん、我未だ知らざるなり」と書いてある。筆者は不明であるが、ここでは倫敦の日本人も決して不景気でない。この文章は当時漱石の目に触れたかどうか。

西洋人の肩車

「明暗」五十四回に曰く「馬鹿を云つちや不可ない。そりや人違ひだ。肩車へ乗つた奴はちやんと知つてるが、僕ぢやない、あの猿だ」――。漱石はヴィクトリア女皇の葬儀の際、ハイドパークまで出かけたが、大変の雑沓なので、下宿屋の親爺に肩車をして貰った。「西洋人の肩車は是が始めての終りだらう」と当時の書簡にある。「明暗」ではエドワード七世の戴冠式の事になっているが、この事実を持込んだに相違ない。但しロンドン時代の漱石に猿という譚名があったかどうか、その点は未だ

詳ならず。

巴里の鰹節

倫敦の漱石に宛てた子規の手紙に「不折ハ今巴里ニ居テコーフンノ処へ通フテ居ルサウヂヤ。君ニ逢フタラ鰹節一本贈ルナドトイフテ居タガモーソンナ者ハ食フテシマツテアルマイ」とある。「三四郎」の中に「原口さんは洋行する時には大変な気込で、わざわざ鰹節を買ひ込んで、是で巴里の下宿に籠城するなんて大威張だつたが、

巴里へ著くや否や、忽ち豹変したさうですねつて笑ふんだから始末がわるい」という会話がある。原口さんは洋画家だから、この二つを簡単に結び付ければ、中村不折がそのモデルだという結論に達しそうだが、他にそれらしい箇所はない。漱石がこの会話を書きつつある際、図らずも往年の子規の手紙を想起して、特に巴里の鰹節の一条を点出したものとすればよかろう。

バス

戸川秋骨の「二万三千哩」を読むと、ロンドンの条に「古風な円太郎馬車然たる所謂オムニバスがこれも沢山に並んで行く。オムニバスには馬がなくて自動車の仕掛けになつて居るのもある。この自動車仕掛のは東京にも直きに出来るさうであるが、則ち二階付きの乗合馬車である」とあって、はじめてそれに乗った感想が述べてある。併しこの英文学者も巡査に道を尋ねて、歩いて行くか、バスを取るか、と聞返された時には、バスとは何の事かちょっとわからなかった。漱石の「明暗」にロンド

ンを回顧した「あの鈍臭いバスがまだ幅を利かしてゐた時代だよ」という言葉があるが、これは秋骨が行ったより何年も前の話に相違ない。バスはそう早く日本には行われなかった。「二万三千哩」の出た明治四十一年には勿論、「明暗」の出た大正五年になっても、東京の路上にはまだあの鈍臭い姿が見られなかったと記憶する。

慶応内閣

漱石がロンドンにいた頃、同宿の人が今に慶応内閣を

作るんだという話をした。即ち慶応年間に生れた者だけで作る内閣の意味で、慶応三年生れの漱石も、辛じて閣員の資格があるというのである。当時の漱石は三十五歳であった。慶応生れということが如何に清新の気を帯びていたかは、今日の人の想像を許さぬであろう。その後歳月の経過に伴い、慶応生れの人が内閣に列する機会も、別に珍しくはなくなったが、慶応という年代は前後三年しかない。慶応生れのみを以て組織する純然たる慶応内閣は、竟に実現不可能であったろうと思われる。

女皇崩御

明治三十四年一月二十二日、英国留学中の漱石の日記に「ほととぎす届く、子規尚生きてあり」と書いてある。当時のロンドンはヴィクトリア女皇が危篤に陥られ、衆庶皆眉を顰むという状態だったらしいが、この翌日崩ぜられた。尚生きてありと書かれた子規は、「墨汁一滴」二月三日の条に「伊藤圭介歿す九十余歳。英国女皇崩ず八十余歳。李鴻章逝く七十余歳」などと筆を揮って居った。海を隔てたこの両者の消息を考え合せると甚だ面白い。

引合

明治三十六年末の漱石の書簡に「僕の事が雑誌に出る度に子規が引き合に出るのは妙だ」とあり、三十八年一月の書簡には「僕の事を評するときは誰でも必ず上田君を引合に出す、上田君は迷惑なるべし」とある。上田敏は同じ大学出の英文学者、子規は予備門以来の旧友というよりも、俳句の方の因縁であろう。この事実は漱石の文壇に現れるのが、比較的遅かったことを示すもののように思われる。

蓄音機

鷗外の出て来る映画があるそうである。何でも貴人の葬列の中か何かであった。これなどは偶然入ったのだが、鈴木三重吉の友人だった加計正文という人が、わざわざ広島から出て来て、漱石の声を蓄音機に吹込んで貰った。勿論予め承諾を得て置いて、然る後上京したのである。明治三十八年の話だから、漱石もまだ大学の先生であった。何を吹込んだかわからぬが、恐らく他に類のない珍品であろう。

草枕批評一斑

漱石の「草枕」が「新小説」に発表された当時、作者のところへ批評を寄せて来た者が何人もあった。それを纏めて持っていると話したら、中川芳太郎が出版したらどうですと云った。「草枕批評一斑として出版したら、早速僕は草枕の原稿料の上へ幾分か持出さなければならなくなる」というのだが、もし出版されて居ったら、明治文学研究者の見遁すべからざる資料になったかも知れぬ。就中最も長く且つ真面目なる深田康算の批評の如き、

今日何処から出現しても珍品たるを失わぬであろう。

俳体詩

漱石、虚子の俳体詩が「ホトトギス」に出はじめたのは明治三十七年八月で、これがやがて同誌上に「吾輩は猫である」の現れる前駆になっている。然るに同年十一月の「馬酔木」を見ると、俳歌と称するものを発表した人がある。名は異っても形式は同じもので、こんな思い付きが期せずして二方面に起る筈はないから、多分前者

に倣ったものであろう。作者は松間生、他に俳句の作なども見えるから、或は歌人中の俳人かも知れぬが、どんな人かわからぬ。出来ばえも無論「ホトトギス」のそれに及ばざること遠い。

漱石と新聞

漱石の文名が一時に揚るに及んで、第一にやって来た新聞は「日本」であった。これは子規以来の関係もあり、社中には碧梧桐が居ったのだから、自ら他より因縁が深

いわけであるが、何でも時々書けということで、「昔の話」一篇を寄せた。明治三十九年元旦号の「日本」にそれが載っている。この時漱石は、毎日一欄書いて毎日十円もくれるなら、学校を辞職して新聞屋になった方がいいと考えたが、到底「日本」の側で承知するものでないから、やはり赤門の中で暮した方がいいと思い止った。

その後明治大学の講師をやめることになり、「報知」からも「国民」からも「読売」からも何か書けと言われているので、いっそ新聞屋になろうか知らんとの意を洩したりしたが、三十九年十一月に至り、「読売」から文

学欄担任の交渉を受け、思案の末断った。その時滝田樗陰に与えた手紙に「竹越氏は政客である。読売新聞と終始する人ではなからう」とあるのを見れば、竹越三叉の発案だったのであろう。もしこの時それが実現して居ったら、少し前に同紙に掲げた「文学論序」が入社の前奏曲になるところであった。「朝日」の話がきまったのは翌四十年三月だから、「読売」の方が数箇月早かったわけである。

昔の話

明治三十九年一月一日の「日本」に漱石の「昔の話」というものが出ている。全集にも採録されて居るが、「日本」で読むと最後のところが、「ブランドを読んで居たら、こんな事が載つて居たから一寸書いて見た。かかる清閑のある新年は目出たい」となって居るのに、全集には「載つて居たから一寸――」として「書いて見た」の五字を削ってしまったのはどういうものだろう。三十九年一月といえば「猫」未だ完結せず、その他は「漾虚集」所収の短篇を書いただけで、「坊つちゃん」も「草枕」

も世に出ぬ頃である。それほど筆硯多忙でもなかったに相違ない。元日の紙上に堂々と「昔の話　夏目漱石」と刷ってあるのだし、「日本」は子規以来の因縁があるのみならず、前年の夏に時々何か書けといって来たこともあるから、「昔の話」は談話筆記でなしに、漱石が執筆したものではあるまいか。「書いて見た」の五字を活かせば、慥にそう認むべき余地を生じて来る。「朝日」入社前にこの一文を加え得るという点に於て、談話か否かを再考する必要がありそうである。

家賃くらべ

漱石が明治二十九年熊本合羽町に居をトした時、熊本の家賃の高きを歎じ、子規宛の手紙に「名月や十三円の家に住むかね」と書いて来た。その子規にも「我境涯は」と前書した「萩咲て家賃五円の家に住む」という句がある。作句年代は漱石の方が一年早いが、恐らく偶然同調をなしたものであろう。この両句は熊本と東京、高等学校の先生と新聞社員との生活状態を極めて端的に語って居るのみならず、子規が後年「仰臥漫録」で試みた知友の家賃くらべと対比しても興味が深い。

無い学問

大学で漱石の講義を聴く学生の中に、いつも隻手を懐にして居る男がある。漱石が不機嫌になって「手をお出しなさい」と言っても、顔を赤くしただけで出そうともせぬ。然るにその学生の友人が漱石に話した所によると、手を怪我して居った為、出したくも出せなかったのだという事であった。そこで漱石曰く、僕等は無い学問を出して講義をして居るのだ。〇〇君も気が利かんではないか、無い手位出してくれてもいいのに――。

この話は馬場孤蝶の記す所である。当時野村伝四に宛てた漱石の手紙に「手のない人に手を出せといふのは愚物に賢人になれといふやうなものだ、是は近頃失敬の至であった、然し僕杯はない学問を出して講義をする位だから学生の方でもない手位はだしてもよささうに思ふ」という一節があるのを見れば、手を出さぬ友人のために弁じたのは野村伝四であったらしい。但「無い学問を出して」云々の機智は、当意即妙の返事でなしに、手紙中の文句の如くである。意味に相違は無いが、事実が違うということになる。

前後

木下杢太郎は漱石の作品に就いて「猫」よりもそのあとの「倫敦塔」「幻影の盾」「薤露行」などに魅せられたと言っている。更に別の文章にも、夏目漱石が「猫」のあとに「倫敦塔」「幻影の盾」「薤露行」などを書いたということが繰り返されている。併し「吾輩は猫である」の第一回が「ホトトギス」に発表されたのは明治三十八年一月、「倫敦塔」が「帝国文学」に出たのも三十八年一月だから、少くともこの一篇だけは前後というこ

とが成立たない。或は杢太郎が読んだ前後という意味かも知れぬが、この文章ではそう受取り得ぬ憾がある。

馬鹿竹

「吾輩は猫である」に出て来る馬鹿竹の話は、子供が読んでもわかるので、昭和に「赤い鳥」が復刊された時、この一節だけ載せたことがあった。馬鹿竹なる者に就いては「漱石全集」の註解を見ても「文学論」に「……桀紂の再生にしてかねて馬鹿竹の再来なり」とあるのを引

いただけで何の説明もない。吾々も固より知らぬが、昔「文芸倶楽部」か何かで「馬鹿竹」なる話を読んだおぼえがある。その馬鹿竹は呑んだくれで夫婦別れをした後、谷中の五重塔の絵図面を引いて大に売り出す。のっそり十兵衛から脱化したような筋だが、漱石の話には何の関係もない。

「猫」の中の挿話は漱石の創作としても、「文学論」にまで出て来る以上、馬鹿竹なる者がどこかに存在しなければならぬ。或は馬鹿竹という名前が汎称のようになって居ったのを、漱石も用い落語家も使ったということに

はならぬであろうか。

行水に烏の句

「吾輩は猫である」には実在の人物がいろいろ取入れられてあるらしいが、本名では殆ど登場しない。寒月君の俳劇の趣向に俳人高浜虚子がステッキを持ち、白い灯心入りの帽子を被り、透綾の羽織に薩摩飛白の尻端折り、半靴という拵えで出て来るのは、極めて珍しい例である。ここに用いた「行水の女にほれる烏かな」という虚子の

句は、明治三十八年七月、「猫」の六が出る二三箇月前の「ホトトギス」に載ったのだから、漱石としては最新の材料に拠ったことになる。もともとでたらめの趣向なるが故に、わざと実在の人名を使用したのだと言えるかも知れぬ。

オヤマフミ

「吾輩は猫である」の寒月君の端書に「旧暦の歳の夜、山の狸が園遊会をやつて盛に舞踏します。其歌に曰く、

来いさ、としの夜で、御山婦美も来まいぞ、スツポコポンのポン」という文句がある。昔読んだ時からこの「御山婦美」がわからなかった。然るに寺田博士の「自由画稿」という随筆を読むと、郷里に居った時分に年取った伯母さんからこの歌を聞かされた。節面白く「コーイーサー、オーツキヨデー、オーヤマ、フーミモ、コーマイゾー」という風に歌って聞かされたとある。「コイサ」は今宵の方言、「オヤマフミ」は多分、山見分の役人のことらしいという解釈がついて居るので、多年の疑問が漸く解決した。多分変体仮名であったろうと思われる「ふ

み」に婦美の漢字が宛てられたため、余計わかりにくくなったのである。冬の闇夜に山中の狸どもが集って舞踏会のようなことをやる、その際に足踏みならして歌う文句だというから、これは漱石の創作でないのは勿論、寒月君の創作でもない。当時の寺田博士からこんな端書が来ていたのを、そのまま「猫」の中に用いたのであろう。

島の娘

「吾輩は猫である」の中に水島寒月君作る所の小唄があ

る。「よべの泊りの十六小女郎、親がないとて、荒磯の千鳥、さよの寝覚の千鳥に泣いた、親は船乗り波の底」――昭和になって一世を風靡した「島の娘」の歌詞は、畢竟この敷衍に過ぎぬような気もする。寒月君のモデルは寺田博士ということになって居るが、果してその作であるかどうか。この一条は苦沙弥先生宛に来た寒月君の端書を披露する所なので、何とも言えぬ。

短刀

サントブーヴが巴里大学で講義をした時分、非常に不評判で、学生の攻撃に応ずるため、外出の際は必ず匕首を袖の下に持っていたという話がある。「猫」の苦沙弥先生がこれを引合に出して気焔を吐くと、迷亭君が傍から、仲見世へ行っておもちゃの空気銃でも買って背負って歩いたらよかろう、と揶揄する。これは笑談半分の話だが、水谷幻花は「演芸風聞録」のために役者から迫害され、実際短刀を呑んで芝居見物に行ったことがあるそうだ。あとから考えれば滑稽でも、当時は双方真剣だっ

たのだと、幻花自身云っている。

あばた

「吾輩は猫である」の苦沙弥先生は痘痕面なるが故に、往来を歩いてあばたのある人に逢うと、その逢った場所まで日記につけると書いてあるが、これは漱石自身の事ではない。但倫敦留学中の日記に「帰りニ bus ニ乗ツタラ「アバタ」ノアル人が三人乗ツテ居タ」と記されているのは事実である。苦沙弥先生が洋行帰りの友人に、西

洋人にもあばたがあるかどうかを尋ね、滅多にない、あっても乞食か立ん坊で、教育のある人にはないようだ、という答えを得るところがある。バスに乗り合せた三人は如何なる種類の人であったか、乞食や立ん坊でないことは明かだが、教育の有無は到底わかるまい。

玉人

頭に丁髷を頂き鉄扇を携えた牧山老人は、理科大学の実験室でガラス球を磨っている寒月君を評して「あゝ云

ふ事をする者を漢土では玉人と称したもので至つて身分の軽いものだ」と評した。蕪村の「玉人の座右にひらくつばき哉」の句に「タマスリ」と仮名を振ってあるのがそれであろう。「蕪村句集講義」の鳴雪説によると、これは「キュウジン」で、「ギョクジン」ではない、「ギョクジン」は「其人如玉」で美人に同じとある。「キュウ」と「ギョク」とは点の打ちどころが違うのだが、活字を作らなければならぬから、こゝは同字で間に合わして置くことにする。「吾輩は猫である」の原本には振仮名がない。全集はどれも皆「ギョクジン」と訓んでいる。

漢訳の「猫」

戦争前であったか、戦争中であったか忘れたが、神田の夜店で漢訳の「吾輩は猫である」を発見したことがある。粗末な薄い本だったから、無論全訳ではない。最初の一句が「吾輩是猫」とあったかと記憶する。値段も聞いて見なかったが、どうせ安かったに相違ない。この種の書物は見た時は何とも思わぬ癖に、あとまで忘れぬところを見ると、やはり買って置いた方がよかったらしい。

手数

神田の白牡丹の主人か何かで病院に入った男が、「吾輩は猫である」を読もうとすると、書物の小口が切ってない。看護婦に小刀をよく研いで切らせたところが、小刀が切れれば切れるほど切り損ってしまう。そこで大いに憤慨して、「成程漱石という男は人に手数をかけるべく出来上つた男だ。博士を辞して文部省に手数を掛けると同様の遣り口だ」と云った。漱石はこの話を誰かに聞いたものであろう、日記の中に書いている。漱石の書物も春陽堂発行以後の分は、こういう手数がかゝらなくな

った。「猫」でも縮刷本なら、そんな手数をかけないで済むところだった。

「猫」の講談

「吾輩は猫である」が三崎座で芝居になったのは、「ホトトギス」の誌上で漸く完結し、書物では中巻がまだ出来上らぬ頃であったが、明治四十年の八月になると、本郷日蔭町の寄席に

夏目漱石先生著

吾輩ハ猫デアル

松林伯知述

という看板が出ていたので、漱石自身面食ったと云っている。どう考えても「猫」は講釈種ではない。看板を出す以上、聴いた人があるに相違ないが、不幸にしてその如何なるものかを知らぬ。

神経衰弱

漱石の神経衰弱に対する見解は、「文学論」の序に略々

尽されて居るが、その後和歌山に於ける講演の中でも、大学の教授を十年間一生懸命にやったら、大抵の者は神経衰弱に罹る、ぴんぴんして居るのは嘘の学者だと云っては語弊があるが、先ず神経衰弱に罹る方が当然だろうと云って居る。漱石は自ら神経衰弱者を以て任じて居り、こゝに立脚して自他の問題を論ずるのだから、その説にも大いに力がある。然るに誰が見ても神経衰弱に縁の遠い、短躯精悍の気に充ちて居った横山健堂が「神経衰弱は興国の病也。吾が帝国の幾多の大人物苦心経営の為め、神経衰弱に陥るに至らずんば、帝国の大発展は望む可ら

ず」と説いて居るのは意外であった。尤も健堂は木戸孝允を以て神経衰弱の先覚として居るので、夫子自身は圏外に居る。その言の陽気なる怪しむに足らず。

「文学論」経緯

明治三十九年十月末、漱石は「読売新聞」から執筆を求められて、「文学論序」（近刊）というものを送った。併し一方では十一月十一日になっても、中川芳太郎を煩わした「文学論」の原稿を見て居る。序文を草した時は

勿論、それが「読売」に発表された時も、本文は校正まで進んでいなかったらしい。

「文学論」の初版が出たのは四十年五月である。漱石はこの本の誤植を気にして、正誤表附で人に贈り、「古今独歩の誤植多き書物として珍本として後世に残る事受合」などと云っていたが、印刷所が責任なしと云うのに憤慨し、鈴木三重吉をして「朝日」に筆を執らしめた。「漱石全集」の書簡を通読すると、これだけの事実がわかる。

但見万里天

「虞美人草」の甲野さんは「万里の道を見ず、只万里の天を見る」と小声に吟じながら叡山を登る。明治四十年二月、第一高等学校の玄関でうつした漱石の写真にも「不見万里道、但見万里天」と題してあるし、同じ年の五月に出版された「文学論」の扉にも、この十字の篆書が朱で刷ってある。「虞美人草」が「朝日」に出はじめたのは六月であった。この二句を誦すると、教職を抛って新聞に入る当時の漱石の軒昂たる意気が、直に眉宇に迫って来るような気がする。

オタンチンパレオロガス

「吾輩は猫である」の中に出て来る「オタンチンパレオロガス」という言葉は、東羅馬の皇帝コンスタンチン・パリオロゴのもじりだという話である。この名前ならば昔巌谷小波の「世界お伽噺」で御馴染のもの（「王城乗取」「池の焼鮒」）であったが、オタンチンパレオロガスという言葉に逢著した時は、直にそれと結び付かなかった。尤もオタンチンという言葉は江戸の洒落本にある。それを東羅馬の皇帝の名に利かせたのが、漱石らしい洒

落であろう。

誤認

「坊つちやん」の中に「二年前ある人の使に帝国ホテルへ行つた時は錠前直しと間違へられた事がある」と書いてあるのは、馬場孤蝶に従えば漱石自身の経験らしい。漱石が学生時代にプロフェッサー・ウードを帝国ホテルに訪問すると、鞄を見せて「錠前が毀れている」と云う。何の事かわからなかったが、ウードの方では錠前直しを

待っているところへ、漱石が行った為の間違なのだから、一概に風体より生じた誤認とのみも片付けられぬ。「赤ゲットを被って鎌倉の大仏を見物した時は車屋から親方と云はれた」とある方は、孤蝶は何も書いて居らぬが、明治二十年頃に同じ下宿の仲間と江の島へ行った時の話だろう。「満韓ところ〴〵」にその時の事を回顧して「赤毛布を背負つて弁当をぶら下げて、懐中には各二十銭づつ持つて」云々と書いてある。

恵比須

漱石の「二百十日」には「ビールはございませんばつてん、ヱビスならございます」という下女が出て来る。「二百十日」が「中央公論」に発表されたのは明治三十九年十月だが、この事実は漱石の熊本在住時代まで遡るべきであろう。鷗外が小倉在住時代の事を書いた「二人の友」を読むと、F君は机の向う側に夷麦酒の空箱を竪に据えて本箱にしている。明治時代に於けるビールの分布状態は知らぬけれど、文学に現れたエビスビールは捜せばまだ出て来るに相違ない。

山手線の恵比須という駅は、附近にあるエビスビールの工場によって名付けられたものだが、この駅名が発表された当時、大町桂月などは「恵比須は思ひ切つたる名前也」と一驚したことがある。爾来五十年、駅名は旧によって変らぬ間に、エビスビールは日本ビールと改名してしまった。もう暫くしたら、駅は何故に恵比須と称するか、わからなくなるであろう。或は逆に恵比須にあるからエビスビールと名付けたのだ、というような考証が生れないとも限らぬ。

京に著ける夕

漱石の入社の辞が「大阪朝日」に掲載されたのは、明治四十年五月五、六両日で、「嬉しき義務」という標題になって居った。併し漱石の原稿が「大阪朝日」に出たのは、入社の辞が最初ではない。それよりも約一箇月早く「京に著ける夕」の「上」が四月九日の紙上に出て居る。この日の新聞が恰も九千号であった。漱石が大学の職を一擲し、「朝日」に入る前提として西下したのは三月二十八日、四月四日大阪朝日新聞社へ往って村山龍平に逢い、ホテルの晩餐会にも臨んで居る。この結果とし

て先ず九千号の為に「京に著ける夕」を草することになったのかも知れぬ。

京都の漱石

漱石が「虞美人草」を書くに先立って、京都に遊んだ時、虚子も亦京都に赴いた。使を出して在否をたずねたところ、漱石の返事に曰く「まだ居ります。すぐいらつしやい、但し男世帯だから御馳走は出来ませぬ、御馳走御持参御随意」と。この手紙は「漱石全集」の戦後版に

は載って居るが、早く虚子が「国民」に連載した「塔」という文章の中に出て来る。漱石の明治四十年の日記を見ると、四月十日の条に「平八茶屋（雨を衝いて虚子と車をかる。渓流、山、鯉の羹、鰻）」とあり、その前日は叡山に登って居るから、前記の手紙は十日のものらしい。虚子はまだ居るという返事を得て、車で上賀茂の狩野亨吉博士の許に漱石を訪ね、それから平八茶屋へ車を駆ったのであろうが、「塔」にはその事は記されて居らぬ。「漱石氏と私」（虚子）の中に収められた「京都で逢った漱石氏」という一文はこの時の事を書いたものである。

講演

漱石が大学をやめて「朝日」に入った後、「文学に於ける哲学的基礎」「創作家の態度」の二講演を試みた。前者は「朝日」に載せ、後者は「ホトトギス」に出たと記憶する。翌年また「朝日」から話があったが、この時は「胸中無一物」の理由で断った。その断る手紙の中に「戸張岩村両氏へ露伴氏でも加へたらば丁度よき時間と存候」とある。戸張は登張竹風、岩村は岩村透であろうと思うが、露伴に頼んだかどうかは知らぬ。

「虞美人草」

漱石がはじめて二葉亭に逢ったのは、朝日新聞入社後だから明治四十年である。二葉亭はその前年の秋、「朝日」に「其面影」を連載したのであるが、当時の漱石はまだそれを読まず、早稲田に移って後、之を読んで敬意を表した。この手紙は伝わって居らぬと見えて、全集には無い。

「其面影」には小野という法学士と、小夜子という女性が出て来る。「虞美人草」にも小野という文学士と、小

夜子という女性が出て来る。この名前の暗合に就いて九州から注意した人があった。漱石の返事に曰く「実は其面影をよまず、夫が為めかゝるコントラストを生じ候」――漱石も二葉亭も、この頃は同じ西片町に住んで居ったのである。漱石が「其面影」を読むに至る動機の中には、この名前の暗合に対する興味も、幾分含まれて居ったかも知れぬ。

漱石は「虞美人草」を書いた後、ツルゲーネフの「ルージン」を読み、或箇所に到って「虞美人草」はこの辺からヒントを得たように思う人があるかも知れぬ、「虞

美人草」を書く前に「ルージン」を読んで居ったら、こんな嫌疑の起らぬように書くのだった、と云っている。これは著者だけが特に強く感ずるので、世間ではそう見ては居らぬようである。「ルージン」の二葉亭訳「浮草」が出版されたのは四十一年九月だが、漱石は勿論この翻訳で読んだわけではない。

浴衣と指環

朝日新聞に「虞美人草」が連載された当時、三越呉服

店から虞美人草浴衣が売出され、玉宝堂からは虞美人草指環が売出されたと何かで見たことがある。小説として の「虞美人草」は今後も尚読まれるであろうが、浴衣や指環はどこにもあるまい。指環の如きは或は残って居るものがあるにしても、その因縁は夙に忘却されて居るに相違ない。

脱落の箇所

明治四十年九月七日、畔柳芥舟に宛てた漱石の手紙に

「大阪の新聞で虞美人草を一回ぬかして済して掲載してゐる。呑気な不都合もあるもんだ。読者は何とも云はない。気のついたのは作者ばかりだらう」とある。念の為に「大阪朝日」に当って見たら、成程十四の四が一回抜けて居った。漱石から注意が行って、はじめて気がついたのかも知れぬ。十四の十三の次にこの脱落の分が出て居る。

丙午

「虞美人草」のヒロインという噂のある婦人が自殺したという記事が新聞に出た。真偽は固より知らぬが、「虞美人草」が作られたのは明治四十年、上野の博覧会もその年の出来事を取入れたのである。たゞいさゝか困るのは、「藤尾は丙午である」という一句で、丙午は六十一年目でないと廻って来ない。明治三十九年が丙午なのだから、その前の丙午は弘化三年、東郷大将と同年でなければならぬことになる。今にこんな偏痴気論も生れるかも知れぬ。

校正可畏

「虞美人草」を「朝日」に連載中、校正係がいろいろ直してくれるために、間違いの正されることもあるが、時に直し過ぎて読者から苦情の来ることがある。こんなのは困ると云って挙げたのは「もう明けて四ツヽになります」という会話で、三十四、二十四、四十四などを略して、四になったとか、四だとかいうけれども、四つになったとは云わない、四つでは藤尾が赤ん坊のようになってしまう、自分ははっきり「四になります」と書いたつ

もりなのに、二箇所とも四つに改めてある。「困りましたね」と渋川玄耳に申し送っている。

こんな間違いはどうせ免れぬ事で、向後もあることであろう、たゞこういうのがあったというだけ校正者に話して下さい、というのである。「虞美人草」は新聞で見たことがなし、切抜を見る機会もないが、これが堂々と活字になっているとすれば、校正可畏の適切な一例を加えたことになる。

「坑夫」の主人公

「坑夫」の由来に就いては漱石自身の談話があって全集に載って居り、全集の解説にもそれが引用してあるが、この小説の主人公を考える場合には、どうしても沼波瓊音の「裸百貫」という文章を一瞥しなければなるまい。この文章には漱石の事を松根王壁先生と書いてあるのをはじめ、小説の題名も「農民」となっているという風に、固有名詞は殊更に変えてあるが、書かれた内容は「裸百貫」で懸値なしの事実と思われる。「坑夫」の主人公は漱石に自分の経歴を話し、これで報酬を得るつもりがな

かなか貰えぬというので「東京新報」にこの顚末を発表して貰いたいと頼んだ。瓊音は当時この新聞社にいたというのだから、無論「万朝報」である。瓊音はこの申入れを青年客気の致すところとして抑止し、漱石と親しい遠倉夫人（大塚楠緒子？）に事情を話した。然るにこの時青年は已に夏目家に引取られ、寧ろ過大の報酬を受けていたので、漱石から新聞の事を問われて正直に答えることが出来ず、それでは無根であることを沼波氏に証明して貰って来いと云われた。その結果先ず青年の来訪、次いで漱石の来訪となり、青年はこの上先生のお世話に

なることは出来ぬ、漁師になります、と云って東京を去るのである。この事は「坑夫」の筋に直接関係はない。たゞ「坑夫」の経歴がこういう人によって語られたことを一顧する必要があるように思う。瓊音は松根先生は裸百貫主義、青年も自分も裸を尊むと云っている。裸を尊む青年がその後どうなったか、更に消息がわからぬらしい。

この青年に関するらしい事が「漱石全集」の断片にある。それだけ読んでは誰の事ともわからぬが、「裸百貫」と併読すると、朧気ながらその輪郭が浮んで来る。

「三四郎」

「三四郎」の予告を渋川玄耳宛に送った時、漱石は題名として「青年」「東西」「三四郎」「平々地」等を挙げ、この中から選んで貰いたいと云ってやった。「小生のはじめつけた名は三四郎に候。「三四郎」尤も平凡にてよろしくと存候。たゞあまり読んで見たい気は起り申すまじくとも覚え候」というので、「三四郎」にきまったらしい。もし「青年」にしたら、同じような田舎出の青年を扱った鷗外の小説と同じ題名になるわけだが、鷗外の

方は二三年おくれているから、後の雁が名を改めることになったであろう。やはり虚心坦懐に見て、「三四郎」が一番よさそうである。

兄妹の画

「三四郎」の中に丹青会の展覧会とあるのは、太平洋画会のことである。「長い間外国を旅行して歩いた兄妹の画が沢山ある。双方共同じ姓で、しかも一つ所に並べて掛けてある」というのが吉田博夫妻であることも、今日

では註して置く必要があるかも知れぬ。鷗外もこの展覧会へ行って「一室の壁面を悉く塞いでゐる」その画を見、「カタログを引繰り返して作者の名を見て、こんな珍らしい旅行をした吉田君と夫人との事を、それまで少しも知らなかつたのを、自分ながら不満足に思つた」と述べて居る。兄妹と夫妻では違うから、その画は恐らく別の場合であろうという人があるならば、この旅行の始終を記した吉田博著「写生旅行」を一読するがいゝ。本文には同伴者が全部妹になって居る。併し巻首に掲げた油画の中には、吉田フジヲという夫人の名を署したのが何枚

か入って居る。

石の門

「三四郎」の中に広田先生が石の門の貸家はいかんと云い、与次郎が「石の門は可いがな。新しい男爵の様で可いぢやないですか」というところがある。これは漱石自身西片町から早稲田へ移る前に貸家さがしをした時の事を用いたらしい。明治四十年九月二十三日森田草平宛の書簡によれば、この貸家の事を知らせたのは草平で、石

門の所在地は千駄ヶ谷であった。漱石は一人で行って見てどこだかわからず、「念の為めもう一遍石門館を見たいと思ひ候が御慈悲に明日御連被下間敷や」と云い、「猶都合によっては石門館の番地町名を御報にあづかりたい、左すれば小生一名にて出掛候」とも申添えている。この結果はどうであったか知らぬが、二十八日には已に早稲田移転と決定、二十九日に引越した。「文鳥」の冒頭に「十月早稲田に移る」とあるのは一日おまけのようである。

赤

明治四十二年中の「漱石全集」の断片に

○洋傘屋の看板。ポスト、烟草屋ノ暖簾、勉強堂の看板。小包郵便車。電柱。風船玉。あか暖簾半襟。

と並べて書いたところがある。皆赤いものばかりである。これが「それから」の最後に於て世の中が真赤になるという際に使われた。勉強堂というのは小川町と駿河台下との間にある書店で、よく学生の入っている店であったが、大正の震災後遂になくなった。

事実

漱石の満洲行は出発当時の端書に「是より出発す。風聞録に出立とある時は在京、見合せとある時は出京。噂と事実とは大概此位の差違あるべきか」とある通り、すらすらと往かなかった。原因は急性胃カタルである。「満韓ところ〴〵」の最初を見ても、停頓の模様はよくわかるが、大阪で発病して中止したということは書いてない。日記を見ても何もない。たゞ内田百閒の書いたものにそうある。尤も百閒は当時まだ中学生で、岡山駅通過の時間を測って構内に入り、一等車の中にそれらしい人を物

色したというのだから、無論あとで聞いた話であろう。愈々出発の際は大阪から船に乗込んで居るようだから、仮に中止にならなかったにしても、百閒が岡山駅の構内に入った時、うまくそこを通過したかどうかは疑問である。

意外の偶然

漱石が「満韓ところ〴〵」の旅行の際は、大連まで伊藤公と同じ船であった。然も大体同じ処を歩いて哈爾賓

で暗殺されたので、その場所は漱石も降りて蹈んだプラットフォームなのだから、全く「意外の偶然」というより外は無い。但「満韓ところ〴〵」の中には一箇所も伊藤公の事は記されて居らず、在独逸の寺田寅彦に寄せた手紙にちょっと出て来るのである。

対照

森槐南に「鉄嶺丸船上聞横山某吹洞簫奏千鳥曲」という一絶がある。槐南はこの時伊藤公の随行であったので、

この鉄嶺丸は「満韓ところ〴〵」の旅に上る漱石も乗った船である。漱石は無事に満韓を歴遊して帰り、槐南は伊藤公がハルピンで狙撃された際に負傷した。翌々年博士を贈られたのも同時であったが、漱石は辞退してしまった。槐南と漱石はこのところ頗る対照的である。

熊岳城

漱石が「満韓ところ〴〵」の時に泊って「黍遠し河原の風呂へ渡る人」と詠んだ熊岳城には、その後北原白秋

が行って「熊岳城雁わたるなり仰臥しに春寒き外の砂湯にぞをる」以下五首の歌をとゞめた。明治四十二年から昭和四年までには二十年の歳月が流れて居るが、この句と歌とから受ける感じはそれほど変っていない。漱石が手で砂を掻き分けて、凹んだ処へ横になれば、一文も使わないで事は済む、其上寝ながら腹の上へ砂を掛ければ、温泉の掻巻が出来る訳であると云った砂湯に、白秋も同じようにして浴したものであろう。但白秋の時は季節が寒かった。「春はまだ河原の砂湯上寒し風邪ひかぬまとそこそこあがる」という歌もある。

鶯

漱石の「門」の終りのところに、銭湯の中で鶯の話をする。一人は今朝はじめて聞いたと云い、一人は二三日前にも一度聞いたと云う。「まだ鳴きはじめだから下手だね」「え〻まだ充分に舌が廻りません」という問答がある。明治四十三年三月四日、寺田寅彦に寄せた漱石の書簡に「昨日湯に入つたら今朝始めて鶯をき〻ましたよ。まだ下手ですねと云つてゐた」とあるのを見れば、この鶯の話は実際銭湯で聞いたま〻を取り入れたのである。

「門」は同年三月一日から六月十二日まで、「朝日」に連載された。この小説の筆を擱くに当り、新聞に出はじめた頃の話を用いたのだと思うと、大勢に関係なさそうな鶯問答も看過しがたい。

屏風と瓢箪

漱石の「門」の中に抱一の屏風を売るエピソオドがある。道具屋が最初につけた値段は六円で、僅かに一円だけ奮発するという程度であったが、売らずに置いたらや

がて十五円になり、遂に三十五円に飛び上る。ここで思い切って手放したが、屏風はその道具屋から家主に売られ、値段は八十円だったということになって居る。志賀直哉の「清兵衛と瓢箪」では、十銭で買った瓢箪を学校へ持って行って磨いていた為、教師に取上げられる。教師は学校の小使にくれてしまう。小使が金に困って骨董屋に見せると、五円から十円になり五十円に至って骨董屋の手に帰した。併し「其の賢い小使も骨董屋がその瓢箪を地方の豪家に六百円で売りつけた事までは想像も出来なかつた」というのである。六千倍になるのは少し激

しいようだが、瓢箪は屏風よりも軽いだけに飛び上り易いのかも知れぬ。

伊達順之助

明治四十二年五月十四日の漱石の日記に「松根の親類伊達男爵の子ピストルで同年輩のゴロツキ書生を打つ」と書いてある。これが伊達順之助で、後年満蒙の曠野に活躍し、張宗援と名乗って居ったが、戦犯として国民政府に捕えられ、上海黄浦江畔に処刑された。正に大衆雑

誌の読物になるべき生涯である。近頃その追悼会が広徳寺で催されたと聞いて、漱石の日記を思い出し、併せて当年の新聞記事を思い出した。もう少し時間の距離があれば、「門」の中の冒険者と結び付くところだが、ピストル事件の翌年に出来た作品だから、そこまで事実の発展する余地は無い。

鷗外署名の「湞滴」

「漱石全集」の日記、明治四十三年十月十八日の条に

鷗外漁史より「溳滴」を贈り来る。漱石先生に捧げ上ると書いてありたり、恐縮。

とある。修善寺に於ける大患を辛じて切抜けて、内幸町の胃腸病院に戻り、「思ひ出す事など」を書きはじめる直前である。こんな本はどうなってしまったか、もし今あれば蒐書家の垂涎物であろう。

聞いた話

「彼岸過迄」の主人公が同じ下宿にいた森本という人物

から聞く風変りな話は、漱石が二人に聞いた話を継ぎ合せたものである。即ち明治四十二年に林久男から聞いた話と、四十四年六月に鈴木春吉から聞いた話とで、舞台は信州と北海道だから大分距離があるに拘らず、森本なる者が一種の放浪者であるため、不自然にならずに一線に結び付くことになる。話の要領は日記に書き留めてあるが、「彼岸過迄」の方が大分委しい。その辺は記憶で補ったものと見える。

船中読書

大正元年九月末、アメリカに渡った水上滝太郎は、船の中で「彼岸過迄」を読んでいる。この書の発行は彼の出発前であったので、何年後かわからぬが、いずれ日本へ帰ってから読む本ときめて置いたところ、見送りの人から贈られて旅鞄に入れることになったのである。太平洋の暴風雨の日、誰もいない喫煙室に於てこれを読了した。当時は「吾輩は猫である」の外、あらゆる漱石の書物の縮刷はまだ出ていない。「彼岸過迄」は菊判の大冊がその月に出たばかりであった。旅中携帯の書にはやや

不適当なものを偶然人から贈られ、暴風雨の船中に読了するという因縁がちょっと面白い。

雨の降る日

「彼岸過迄」の中の「雨の降る日」は「己は雨の降る日に紹介状を持つて会ひに来る男が厭になつた」という言葉で了って居る。この一篇は漱石が末女を亡くした顚末を題材にしたもので、「彼岸過迄」の巻首に「この事を亡友三山と亡児ひな子の霊に捧ぐ」というデジケーショ

ンがあるのもその為であるが、一方明治四十四年の日記を点検すると、十一月二十九日にこの記事がある。但雨が降って居らぬのみならず、快晴である。宝生新が来て「盛久」を習う事があり、日暮に中村菊と対談中、卒然として末女が逝くことになって居る。小説の事実を穿鑿することが近頃はやるが、この一段はいささか事実から離れて居ると云って差支ない。中村菊は勿論紹介状を持って来る客でなし、雨の降る日に因縁の無いことも前記の如くである。作品の上の技巧か、事実の直叙に堪えなかったか、二者いずれかに帰すべきであろう。

序文（一）

書物の序文は幾つも書いて居るうちに自ら趣向が尽きるらしい。漱石なども後には屢々著者宛の手紙を以て序に替える方法を執った。田村俊子の「あきらめ」の序を森田草平が候文で書いた時、この人にしては珍しいと思ったが、これも「千代紙」や「新春夏秋冬」に於て漱石が先鞭を著けて居る。手紙は一々相手を異にする為に、序文の単調に陥り易い弊を多少免れ得るかも知れぬ。

序文（二）

漱石は「土」の序文を草する為に「前後半日と中一日を丸潰しにして」その校正刷を読んだ。「唐草表紙」の序にも、「校正刷五百八十頁今日漸く読み了りました」と書いてある。池辺三山の「明治維新三大政治家」が出版された時には、小説執筆中の故を以て一度序文を断り、再版の時にその序文を草した。嘗て寓目したものであっても、一応読返した上でなければ序文を書かぬというところに、漱石の性格の一面が窺われる。「土」の序も「三大政治家」の序も「彼岸過迄」を書き上げてから筆を執

ったので、三山は「彼岸過迄」執筆中に急逝した。三山が「土」の為に序を草する筈で、遂に約を果し得なかったことなどを考えると、こういう経過の間にも或因縁が附纏って居るような気がしてならぬ。

書名

田中王堂の「書斎より街頭へ」が出版された時、漱石が「朝日新聞」で批評して、「日本語としては珍らしい書名である。書斎より街頭へ打つて出るの意だと王堂氏

自身が註釈を施してゐる。学者の見識を書斎に蓄へて、志士の功名を街頭に樹てようとするのが、氏の希望ださうである。賛成である」と云った。その後この種類の書名もいろいろ出た。「壇上より国民へ」「紅葉より小波へ」「巴里より葛飾へ」――その意味合は内容によって違うけれども、繰返されるに従って珍しくなくなると共に、いつの間にか過去の書名になってしまった。現在では最初の「書斎より街頭へ」にしても、あまり見かける機会がない。

背文字

漱石の書物は自ら装頓を試みた「こゝろ」「硝子戸の中」の二種以外、自分で背文字を書いたのはないようである。芥川龍之介も「邪宗門」だけであったと記憶する。尤も漱石は「三重吉全作集」の背文字を全部書き、澄江堂も菊池寛の書物の背文字を書いたりしているから、人の家の標札を頼まれて書くことがあっても、自分のは誰かに頼むのと似た消息があるのかも知れぬ。

ポッケット本

小型本の歴史を顧みる場合、袖珍と呼ぶは古く、ポッケットと呼ぶは稍々後である。明治四十三年四月の「日本及日本人」に「ポッケット論語。ポッケット孟子。ポッケット外史。ポッケット菜根譚。曰く何。曰く何。大国民却つてポッケットを愛す、又妙」と揶揄しているから、その頃流行を極めたものであろう。漱石の「門」の中にも、ポッケット論語が好きで、汽車へ乗ったり遊びに行ったりする時には、いつでも懐にして出るという芸者の話があったと記憶する。漱石の小説の小型本が頻り

に出るようになったのは、大正初年以後であったが、この時は大概縮刷と称し、ポッケットの名は用いられなかった。

縮刷本

縮刷版の小説集は何が最も古いか、春陽堂の「紅葉集」は明治四十二年から出て居る。引つゞき「露伴集」「鏡花集」「風葉集」「渋柿集」など同じ形のものが現れたが、「吾輩は猫である」の縮刷は一足おくれて四十四年

七月に大倉書店から出た。漱石の縮刷本はこれが最初である。それが大正二年の一月に「鶉籠　虞美人草」の縮刷になったのをきっかけとして、漱石の著作は「文学論」「文学評論」「社会と自分」に至るまで、皆縮刷になった。最初から小型であるため縮刷にならなかったのは、「切抜帖より」と「硝子戸の中」だけである。

装幀

書物の装幀は悉く著者の好みに帰するわけには往か

ぬ。書肆の方針も相当重きをなすからである。併し至誠堂の大正名著文庫が川村清雄の装幀、中村不折の背文字で続けて来た際に、漱石の「金剛草」に至って津田青楓の装幀を用い、それまでのクロース仕立を木版表紙に変えた如きは、明かに著者の好みに出づるものであろう。漱石の著書は「吾輩は猫である」から「行人」まで橋口五葉、「こゝろ」は自ら装幀し、「道草」から津田青楓になった。泉鏡花の著書が小村雪岱装幀になるのは大分後であるが、全集は菊判が岡田三郎助、四六判が鏑木清方で、雪岱は与らなかった。芥川龍之介の書物が小穴隆

一に一定したのは「夜来の花」以後だったと記憶する。著書と装幀との関係を、多くの作者に就いて、いろいろの角度から調べて見たら面白そうである。

大正三年十月二十日、橋口五葉に宛てた書簡に「此間は拙著の装幀について御同情のある御批評を下さいましてありがたう存じます」とあるのが「こゝろ」に対する批評であろう。漱石がはじめて試みた著書の装幀に就いて、従来その装幀を一手に引き受けた五葉が何と評したか、内容を知りたいと思うが、この書簡は無論伝わっていない。

署名本

馬場孤蝶がモーパッサンの傑作集というものを贈った時、漱石は礼状の中で、あゝいうものには署名が欲しい、自分ばかりでなく皆そう思いはせぬか、自分ももとは気が付かなかったが、近頃は一々自分の名、先方の名を書くことにした、と云っている。署名本の話もいろいろあるに相違ない。嘗て国木田独歩が茅原華山に贈った「独歩集」を持っている人があったが、その人歿して十余年、今存否を知らぬ。

出さぬ句集

詩人の歌が詩に掩われ、劇作家の小説が脚本の下積になる一方に、何かで有名になった人の著書は無条件で行われる。野田大塊の俳句は屢々新聞の噂に上り、永田青嵐をして綿入りと評せしめたが、生前自分で句集を出したりはしなかった。その青嵐もいろいろな著書があるに拘らず、句集は公にして居らぬ。大正三年十月、松根東洋城に宛てた漱石の手紙に「此間岩波が来て僕の句集を出したいといふから僕の句は散乱してまとまらないと云

つたら夫は自分が方々へ行つて書きあつめると云つた。僕は恐縮して未だに許諾を与へずにゐる」とある。その癖漱石の手許には、正岡子規に送った句稿をはじめ、優に一巻を成すに足る材料があったのだ。書肆から持込まれゝば何でも書物にする今の人とは、やはり心掛の違ったところがある。

小冊子

漱石が阪本四方太の「夢の如し」を評した中に「非広

告的な小冊子」という言葉があった、長途の旅行から帰った時、この小冊子は「書冊堆積の間に潜んでゐて、人の注意を受ける迄は、余自身にも何処にあるか気が附かなかつた」というのである。小型の書物は書斎に於ても屢々存在を失する。「夢の如し」の紅いクロース表紙は、決して華かでないことはないが、小型であるのみならず、余りに薄いので、竟に人目を牽かぬのであろう。書肆の店頭や古書展の会場でも、この小冊子を見かけたことは殆ど無い。

デジケーション

大正二年に敬文館から出た「芭蕉の臨終」（沼波瓊音）には、巻首に「この書を夏目漱石先生に献ぐ」と赤い字で刷ってある。当時漱石から著者に送った手紙に、全く意外で大いに驚いた旨を記し、「夫ですぐ読まなければならんと思つて早速読みました」と云って居る。こういうデジケーションに関する挿話も捜せばいろいろある筈である。赤堀又次郎著「国体及国史のはなし」の巻首には「謹みて武藤山治君の霊前に献ぐ」とある。斯人の事だからいずれ何か謂れがあるのだろうが、ちょっと意外

な感がないでもない。

禅僧の希望

馬場孤蝶が代議士候補に立った時、文壇の人々が後援のためにその作品を寄せ、「現代文集」の一巻は成った。菊判一千百三十頁というのだから、外観だけでも大したものだが、執筆者八十名の顔触を今日から見ても、誰だかわからぬような人はあまりいない。漱石がこの時寄せたのは、学習院で講演した「私の個人主義」であった。

漱石の晩年屢々手紙をよこしていた若い禅僧が、或時この書物の借覧を申し込んだのも、恐らくこの講演が読みたかった為であろう。

「私の個人主義」は「金剛草」が出るまで「現代文集」に入っただけであり、この書物は坊間に沢山出ていなかったから、禅寺などにいては手に入れにくかったに相違ない。併し漱石はこの手紙の返事と同時に「金剛草」を送っている。もし「私の個人主義」を読むのが目的だったとしたら、禅僧の希望は二重に達せられたことになる。

書物の運命

内田百閒は「吾輩は猫である」の上中下とも、岡山の本屋で買った第一版を愛蔵しているそうである。然も戦災で一切の蔵書を焼いてしまったに拘らず、この三冊の「猫」は当時嘱託になっていた郵船会社に置いてあって、不思議に助かったという。これは単なる偶然であろうか。決して偶然とのみ云い去ることは出来ない。書物の運命にも往々にして人間と同じものがあるからである。

服部書店

「吾輩は猫である」がホトトギスに連載された当時、第一番に注目したのは服部という書店であった。「猫」の奥付を見ると大倉、服部の二人名義になっているから、内実は共同作業だったのかも知れぬが、漱石の書簡にも最初の間は服部とのみ出て来る。森田草平、生田長江、川下江村三人共著の文集を、漱石から話して出版させたのも服部書店である。但この書店が「猫」の上巻と前後して落語研究会員の「新撰落語集」だの、関根黙庵の「江戸の落語」だのを出しているのを見ると、果してどの程

度に漱石の知己であったかわからない。

明治三十九年の秋に「猫」が芝居になったことがあって、最初は漱石自身忠臣蔵の後だから面白いなどと云っていたが、間もなくそれは服部書店から本郷座の連中に頼んだことがわかった。漱石歎じて曰く、人間も是程営利的に傾けば世話はない、芝居でやりたければさせてやるが、役者に頼んでしてもらう坏という了見がどうして出来るだろう。たのむ場合には役者の方が作者より上手な場合だ。今の役者輩に猫がわかるものは一人も居やしない。

「日本の面影」

末松青萍の名で出た「夏の夢日本の面影」という書物は、今でも時々古書展で見かけることがある。最初この翻訳を漱石へ持ち込んだが引受けず、漱石の斡旋で当時大学生だった森田草平や栗原古城の方へ廻った。原書の名は「ファンタジー・オブ・ジャパン」だが、それをこう改めたので、「何だか本郷座でやりそうじゃないか、青萍先生も存外話せない男だ」と漱石は冷評している。

火遁、夢遁

漱石が「土」に書いてある事は全部本当かと尋ねたら、全部本当ですと長塚節が答えた。あの最後の火事のところも本当かと云ったら、彼処だけうそですという返事だった。全篇のつゞまりをつける為に、特にあの一場を設けたらしい。これを小説に於ける火遁の術と名づけるならば、筋の運びに窮して夢を見させるなどは、夢遁の術と称すべきであろう。この方法は古いようで、存外今の小説にも蹈襲されて居る。人間の智慧には自ら限度のあるものである。

「金之助の話」

明治の新聞小説の最初は「絵入新聞」に出た前田夏繁の「金之助の話」で、明治十一年九月だと野崎左文の「私の見た明治文壇」に見えて居る。「須永の話」「梅龍の話」「首の落ちた話」「恩を返す話」――こういった標題は小説としても稍々新しいもののような気がするが、新聞小説が最初からこの手を用いて居るのは意外であった。尤もその内容は三分の事実に七分の潤色を加えた続き話だそうだから、やかましく云えば小説とか文学とか

称すべきものではないかも知れぬ。金之助は何者かわからぬが、漱石の本名と同じなのも一奇とすべきである。もう一つ附け加えれば、京都に金之助という芸者がいて、漱石の小説を愛読するということを、修善寺の大患後に東洋城から聞いた。漱石が後年京都に遊んだ時逢った金之助というのが、多分それであろう。

翻案、剽窃

作家として一人前になって、方々から原稿を頼まれる

ようになると、自然の勢として材料に窮して来る。已むを得ず座辺の書物に之を求める。紅葉もボッカチオの翻案などで御茶を濁したことがあった。漱石の手紙に「風葉先生は此前もツルゲネーフか何かを済して自作の如く御吹聴に相成ったのだから、今回の荒野のリヤも御驚きになる事はない」とあるのも似たような消息であろう。それが外国の場合は翻案で済むが、もう少し距離が近くなると物騒である。昔「文芸倶楽部」が石橋思案選で懸賞小説をやった時も、殆ど毎回剽窃があった。中には同じような投書文学から失敬したのがあるのだから、如何

なる選者にしても、そうは目が届かぬ筈である。

鮪

漱石が小説「縁」（野上八重子）を「ホトトギス」に推薦した時、「大抵の女は信州の山の奥で育つた田舎者です。鮪を食つてピリヽと来て、顔がポーとしなければ魚らしく思わない様ですな」と云った。それに次いで「ホトトギス」に出た「七夕さま」は「大変な傑作」と評し、「原稿料を奮発なさい」と高浜虚子に申し送って居る。

然るに滝田樗陰が「夏目先生があんなものをほめるに至っては聊か先生の審美眼を疑わざるを得ず」と云ったと聞いて「あれは北国で仙台鮪ばかり食つていたから、そんな事をいうのだろうと思う」と一笑した。同じ人の作品を賞めるに当り、二度まで鮪を引合に出したが、それが二度とも他の鑑賞力を嘲る場合に限られて居るのは妙である。

偶然の機会

皆川正禧が漱石のところへ来て、野間真綱に渡すべき洋書を二冊置いて行った。その一冊がラフカディオ・ヘルンの「怪談」で、漱石は御蔭で之を通読したとある。明治三十七年の暮あたりの話のようだから、ヘルン歿後間もない頃である。書物を読む因縁の中には、こんな偶然に近いのもあるらしい。

書物評

有島生馬が「蝙蝠の如く」を贈った時、漱石はこの書は愛読書として永く書架に蔵して置く、たゞ失礼ながらあの装頓は不服だ、もう少し内容と釣合った面白いものにしたらばという気がしてならぬ、と申し送った。阿部次郎が「三太郎の日記」を贈った時は、この名前は自分の好まぬものだ、と云った。装頓と書名とに関する漱石の趣味は、この短い言葉に現れて居る。こんな率直な礼状をくれる先輩も、今はあまり無いかも知れぬ。

怒ったような字

大正五年九月、千葉県一宮宛に出した漱石の手紙に「最後に久米君に忠告します。何うぞあの真四角な怒つたやうな字はよして下さい」とある。学生時代の久米三汀は新傾向派の俳人であったから、「真四角な怒つたやうな字」というのは、多分碧梧桐流の六朝を学んだものと思われる。

漱石は俳句の方では自ら十八世紀派を以て任じていた。従って当時俳壇を風靡した新傾向運動の如きは、寧ろ冷眼に眺めていたであろうが、書道の方の六朝流行は

甚だ不満であった。橋口貢宛の手紙に「近来当地にては六朝一派無暗に幅を利かし自分の字をかゝずに矢鱈に四角張ったものを作り箱の様な展覧を催し喜び居候」と云い、戸川秋骨宛の手紙にも中村不折を評して「あの男の画も書も駸々乎として邪道に進歩致し候、あゝ恰好ばかり奇抜がつてどうするかと思ひ候」と云っている。その影響が青年の上に在るのを見て、右の忠告となったものであろう。

小説借覧

明治四十五年中の書簡を見ると漱石は橋口貢から「土」及「朝鮮」の借覧を申込まれて居る。清国湖北省沙市などという所にいたら、実際こういう書物の入手も困難であったろうが、この事実は当時の小説の出版部数幷に分布状態を考えさせるものがある。海を渡ってその手紙が漱石の所に達した時、「朝鮮」の方は誰かが借りていた。それを返して貰って小包で送るまでに約半月かゝって居る。何となく悠々たる感じである。「朝鮮」は同年二月、「土」は五月の出版だから、当時としては新刊書の部類

に入るべきものでもあった。

探偵小説

鷗外が「田楽豆腐」の中で自己の作品に就いて「写実的に犯罪を書くと探偵小説だと云はれる」と書いたのは多分「鼠坂」のことであろう。あの作品には探偵らしい経緯は書いてないが、探偵小説の範疇に入るべき要素は慥にある。後人がこれを探偵小説集の中に編入しても、そこに何分かの理由は認めなければなるまいと思う。併

し漱石の「倫敦塔」を推理小説に分類するに至っては、編者の頭を疑わざるを得ない。「倫敦塔」に描かれたものは悉く幻想で、それを現実に見た塔の中に織り込んだに過ぎぬ。推理と幻想とが同席して矛盾せぬと考えることは、少くとも吾々の頭では不可能である。

漱石の探偵嫌いは「猫」や「草枕」の中に片鱗を見せている。もし漱石の作品で探偵趣味に結び付けるものがあるとしたら、「彼岸過迄」の一部分ぐらいのものであろう。

高等講談

鷗外の作品の中には、漱石の小説に関する事がちょいちょい出て来る。改って批評と称するほどでないにしても、鷗外の気持は窺うことが出来る。漱石は鷗外の作品をどう思っていたか知らぬが、「栗山大膳」とか「堺事件」とかいうような歴史物に就いて「世間では高等講談などと云つて悪く云うが、私は面白いものだと考える。物その物が面白いのみならず、目先が替つて居るだけでも面白い。高等講談などと云つて、一笑に附すべきものではない」という談話がある。鷗外のああした作品が高

等講談というような批評を受けたという事実も、一応記憶して置く必要がある。

同級生

水落露石編の「下萌集」は装頓の上で稀に見る高雅な俳書と云うべきであろう。漱石も一本を贈られた礼状に「あんな心地のいゝ贅沢な本はあなたでなくては容易に出来ません」と述べているが、巻末に挙げられた作者名に就いて、和達陽太郎といふのは高等学校の同級生であ

る、よく出来た人で顔は覚えてゐる、と附加えて居る。和瑾女と号するこの人の細君が金色夫人として知られた人であった。漱石と同級ならば紅葉とも高等学校で顔ぐらい知っていたのではあるまいか。和達陽太郎の名は「十千万堂日録」にも出て来るが、そういう点には何も触れていない。

数年の差

「寅彦先生閑話」という書物を読むと、「先生は上京後

間もなく漱石の紹介によつて根岸庵に正岡子規を訪問してゐる。この時分から夏目漱石を囲む文学同人の一人になり、「ホトトギス」に小説や随筆、小品文を発表するやうになつた」と書いてある。寺田博士の上京は明治三十二年九月だから、夏目漱石を囲む文学同人というほどのものはなかった。強いて云えば熊本に於て俳句を作る少数の仲間位のものであろうが、それならば特に上京後の条に記すことはあるまい。小説や小品を「ホトトギス」に発表したのも、漱石の帰朝後「吾輩は猫である」が生れた後の出来事である。年代を隔てて顧ると、当時の数

年は一弾指の間の如く感ぜられるのかも知れぬが、この数年の上にも自ら順を追うて進む過程がある。当時の「ホトトギス」に現れたものは、牛頓のペンネームによる少数の短文と、裏画その他の募集に応じた少数の作品があるに過ぎない。

牛と蜘蛛

漱石に「痔を切つて入院の時」という前書で「秋風や屠られに行く牛の尻」という句がある。先師に倣ったわ

けでもあるまいが、芥川龍之介にも痔痛を詠んだ「秋風や尻ただれたる女郎蜘蛛」という句がある。秋風という季題が偶然一致して居る上に、自分を他の動物に擬して居る点も変りがない。若し牛に拮抗するほど大きな蜘蛛があるとしたら、それこそ妖怪画巻中のものであろうが、この句からそうした妖気は感ぜられぬ。

万年筆

内田百閒の「百鬼園夜話」に漱石の形見に貰った万年

筆の事があって、たしか「彼岸過迄」から「明暗」の前まで使われたと思うと書いてある。然るに漱石自身の「余と万年筆」に従えば、「彼岸過迄」を草する時は「又一時代退歩してペンとさうしてペン軸の旧弊な昔に逆戻りした」ことになるのである。「彼岸過迄」の完結はその名の如く明治四十五年四月二十九日、内田魯庵から贈られたオノトで丸善の為に「余と万年筆」を草したのは同じ年の六月らしいから、「彼岸過迄」の完結迄はペンで押し通すつもりで居ったという漱石の初志は、先ず貫かれたものと見るべきではあるまいか。

インク、ペン

漱石はブリュウブラックのインクが嫌で、セピアのインクを常用した。万年筆に入れる場合も同様であった。現に吾々の見た二三の原稿の字は皆セピアで書かれて居ったと思う。田村俊子の「あきらめ」の原稿は、紫インクの細い字だったそうだ。このインクの色は漱石、俊子の二作家に就いて、慥に或者を語って居るような気がする。

岡本綺堂はどんな場合にもブリュウブラックにGペン

を用い、ジジーという音がせぬと頼りないと云って居った。漱石もペリカンという万年筆が厭になって、暫くペンで押通して居るうちに、丸善からオノトを貰って使い出した。この万年筆は明治四十五年から大正五年まで使用に堪えた。それが「明暗」の百七十回に至ってペン先が折れたのは、漱石が世を去る前兆だったと考えられぬことも無い。――昔の筆や墨に比べたら、よほど実用的に傾いて居るにせよ、インクやペンにもそれぞれ話題があるものである。

朝日

漱石の常用した煙草は朝日であった。外出した際に敷嶋を買うのは、十銭銀貨一つで釣銭が要らぬからだと云っている。大学をやめて終生「朝日」に居ったことを結び付けると、何か意味がありそうだが、そう旨くは往かない。値段は幾らだか知らぬが、妻がこればかり買って置くから吸っているのだという話である。

印

「漱石印譜」に収められた印は全部で四十顆あるが、刻者に就いては何の記載もない。漱石の談話の中に日本派の俳人が彫ってくれたということがあり、天下の篆刻家という先生に押掛けられた話もある。書簡を子細に見て行くと、「漱石山房」の印が俗でいやになった、ひまが出来たら一人でうまい奴を彫ってやるとか、木村芳雨に銅印を依頼したとかいうことが出て来る。「尋仙未向碧山行。住在人間足道情。明暗双双三万字。撫摩石印自由成」という詩は「明暗」執筆中のもので、その際石印を

撫摩する癖を生じたらしい。

篆字

漱石が古道具屋で印を買って、篆字がよくわからぬのを、菅白雲に手紙で尋ねたら、その一は「版権免許」の四字であった。そこで又はがきで「篆字を調べてもらつた処はいゝが版権免許は驚ろいたね、元来何に使つたものだらう、どうも御苦労さま、難有いがつまらない」と申し送った。芥川龍之介にも蔵六の印を得た時、お鄰の

先生香取秀真に印影を示して教を乞う手紙がある。篆字というものはとかく素人を悩ますらしいが、それだから印鑑の文字を改良しようという便宜論も耳にせぬようである。

ニッケルの時計

漱石が明石で講演をした時、「一流の芸者とか何とかなると、一寸指環を買うのでも千円とか五百円とかいう高価なものの中から選取をして余裕があるように見え

る。私は今茲にニッケルの時計しか持つて居らぬ」と云ってチョッキのポッケットから時計を出して見せた。この時計は大正五年十二月、遺骸と共に荼毘に付されたそうである。明治三十二年の漱石の句に「ニッケルの時計とまりぬ寒き夜半」というのがあるが、果して同じ時計であるかどうか。

寺田博士の「思ひ出るまゝに」という歌の中にも、「講壇の隅にのせおくニッケルの袂時計を貴しと見き」というのがある。ニッケルの時計は皆の印象に残ったと見える。

芸術家気質

庄野宗之助（伊甫）と云ったところで、今ではあまり記憶して居る人もあるまい。この人の画を渡辺和太郎が買うことになった時、値段が百円であったのを、中に立った漱石が買手の意を受けて、七十円に負からぬかという交渉をしたら、買う人には少々高価かも知れぬが、一厘も引けぬと云って来た。そこで漱石は渡辺和太郎に「僕は其手紙のうちに芸術家の気骨があらはれて居るのを見て非常に気に入りました。彼は貧乏である。しかも自己

の画を百円より一厘も負からぬと云ふ。其裏面には自分の画にそれ丈の労力の価を認めぬものは買つてくれなくてもよいと云ふ気概が躍つてゐる。たのもしい男であります。あれだから下宿にくすぶつて情けない生活をしてゐるのであります。私はあなたに買つてくれと勧めはしません。只負からぬといふて来た事を御報知する許りであります」と云つてやつた。その後十日余りたつて百円の小切手が漱石の手許に届いた。――何となく気持のいゝ話である。三人とも役者が揃つて居る為であろう。

平井晩村

漱石に序文を書いて貰った人は前後を通じて大分あるが、比較的初期に属するところで、平井晩村などという人は、今では世人から殆ど忘れられてしまったろう。その序文のある「野葡萄」という書物も見たことが無い。たまたま古書展にあれば、大正の再刊本である。後には民謡作家になっていたと思うが、歌集「伶人」の附録の「白菊会詠草」に名を列ねて居り、「水汲むと舟をよせたる秋風の淡路は昼もうつ砧かな」というような歌を詠んで居る。田波御白、土岐湖友（善麿）、吉植愛剣（庄

亮）等と同じく金子薫園門下の歌人だったわけである。「漱石全集」によって名は伝えられても、その人その著書両ながら、俄に詳にしがたい。

太刀雄

大正四年六月二十一日、郵船会社の神谷久賢という人に宛てた漱石の書簡に「米満さんは其後どうしました」と書いてある。米満さんは米窪満亮、当時郵船の社員として「海のロマンス」を「東京朝日」に連載し、一躍そ

の名を知られた。漱石がこの書のために書簡体の序を与えたのは、大正二年の十二月で、その才筆を認めると同時に、筆が達者過ぎることを戒めている。太刀雄という往年のペンネームが殆ど忘られた時分に、「海のロマンス」の著者は労働大臣として現れたが、久しからずして物故してしまった。

逆の画

「猫」を書く当時の漱石の断片に「奇体な事にはK君の

絵は逆かさにしても真直にしても印象の点に於て格別の異りはない」とある。苦沙弥先生の水彩画は迷亭君をして「遠近無差別黒白平等」と評せしめたが、逆さの事は書いてない。然るに鷗外の「かのやうに」の中には「君が倒さに見ても同じ事だと云つたあの画が売れた。あの時僕はタアナアの画が実際倒さに懸けられた例があると云つて、自己を弁護するために歴史を引合に出すと云ふ、最もいく地のない窮策に出たのを、君はまだ記憶してゐるだらう」ということがあり、芥川龍之介もまた「あの頃の自分の事」で松岡譲の水彩画に触れて、「当時彼の

描いた水彩画の一つにさかさまにした方が遥に画らしくなるものゝあつたのは今でもよく覚えてゐる」と書いた。そういう水彩画の世間に散在するのは怪しむに足らぬが、奇警な批評も三度繰返されると、いさゝか陳腐になって来る。逆さにしても変りがないというよりも、逆さにした方が画らしくなる方が積極的ではあるが、それだけでは陳腐を救う所以にならぬ。

青木繁

「それから」の中に「いつかの展覧会に青木と云ふ人が海の底に立つてゐる脊の高い女を画いた」とあるのは、青木繁の「わだつみのいろこの宮」のことである。漱石は「文展と芸術」を論じた時にも、「自分はかつて故青木氏の遺作展覧会を見に行つた事がある。其時自分は場の中央に立つて一種変な心持になつた。さうして其心持は自分を取り囲む氏の画面から自と出る霊妙なる空気の所為だと知つた。自分は氏の描いた海底の女と男の下に佇んだ。自分は其絵を欲しいとも何とも思はなかつた。

けれども夫を仰ぎ見た時、いくら下から仰ぎ見ても恥づかしくないといふ自覚があつた」と云っている。「文展と芸術」を草するより半年ほど前に、津田青楓に宛てた手紙にも、「青木君の絵を久し振に見ました、あの人は天才と思ひます。あの室の中に立つて自から故人を惜いと思ふ気がしました」と書いてある。漱石はこの画家と直接何の交渉もなかった。作品を見ただけであった。正に知己の一人に算うべきであろう。

宮崎虎之助

内田百閒の「漱石雑話」という講演筆記を読むと、青山斎場の葬式の時、襷をかけ鉢巻をした男が、気狂いか、予言者気取りか、何ともわからぬ事をわめき立てて居ったとある。これは芥川龍之介の書いた「葬儀記」に出て来る宮崎虎之助の事らしい。前者は何人であるか知らぬので、その風体を書き、後者は宮崎虎之助たることを知っていた為、右手で盛なジェスチェアをしながら、死は厳粛であるとか何とか云って居るという言動を叙して、あまり宮崎虎之助らしいので、それ以上には腹も立たな

かったといって居る。併看するとちょっと興味がある。

宮崎虎之助は昭和三年に「神生画集」という立派な画冊二巻を出した。その序文に明治三十六年、三十二歳の時に予言者になったと書いてあるから、明治五年生れのわけである。漱石の葬儀の時には四十五歳、昭和三年には五十七歳になって居る。

無用の詮議

漱石が修善寺の大患に先立って胃腸病院に居った頃の

日記に「倉光空喝来。うそを書きましたと云つて名士禅とかいふものを見せる。余に関したから嘘を書いてゐる。君は新聞記者をやつてづうくしくなつてゐる上に座禅などをやつて二重にづうくしくなつてゐると云つてやつた」とある。已に本人がうそを書いたと自白し、漱石が「から嘘」と認めて居る以上、とかくの詮議は無用の沙汰だが、漱石が宗演和尚から授けられた公案は、趙州の無字でなしに、父母未生以前本来の面目だった筈である。「門」の宗助も「父母未生以前本来の面目は何だか、それを一つ考へて見たら善からう」と云われて居るし、「鶏

頭」の序にも「昔鎌倉の宗演和尚に参して父母未生以前本来の面目はなんだと聞かれてぐわんと参つた」とはっきり書いてある。「名士禅」がこれを趙州の無字にして「居室に帰り一向専念、無？　無？　無？　無？」などとやったのは、どうやら「夢十夜」の第二夜からの思付きらしい。

使用されぬ紹介状

人の紹介状はその性質上、必要に迫られて書いたもの

が多いと思われるに拘らず、往々にして紹介された相手に達せずに了る場合がある。漱石が高浜虚子を狩野亨吉博士に紹介した手紙は、虚子の青年時代、未だ一家を成すに至らぬ頃のものだが、使用されなかった為に虚子の手許に残り、「漱石全集」に収められた。孫逸仙が南方熊楠を犬養木堂に紹介した一通も南方家に残り、「南方熊楠全集」の月報に使用された。この二つの場合は紹介状が当初の目的通り用いられて、両者が会見したところで、後の運命に影響を及ぼしたかどうかわからぬが、多くの紹介状の中には、それが使用されると否とで天下の

風雲に関するものも絶無ではあるまい。但この漱石や孫逸仙の紹介状は、相手の許に達して居ったら、或は当座の用を弁ずるにとゞまり、印刷されて第三者の目に触れる機会は無かったかも知れぬ。個人的な紹介の目的を果さなかった代りに、少し大袈裟な言い方をすれば広く天下に紹介したことになる。妙なものである。

博士

田村俊子の「あきらめ」の中に博士廃止説を唱える人

がある。「博士の称号位世人を誤るものは殆ど無からう。博士にさへなりや豪いものと世人は思ふだらう。殊に医科は可かんね、博士になると診察料を高値く取る。正札附の詐欺師だ。国家が命令して国民を瞞着させる様なものだ」という調子で大分手きびしい。「あきらめ」の成ったのは明治四十三年、漱石が博士を辞退したのは四十四年だから、その意見は似ているけれど、直接関係はあるまい。俊子の師たる露伴が博士になったのも、漱石が辞退したと同じ時であった。

「満韓ところ〴〵」の旅行の帰りであろう。釜山から馬

関へ渡る船の中で峰八郎という人の細君に引き合された時、主人公が真面目な顔をして、これは夏目博士と云い、細君も「お名前はかねて伺つて居ります」と丁寧に御辞儀をしたから、漱石も已むを得ず、はあと云って博士らしく挨拶した。博士号辞退以前の漱石にも、博士に関する話題は多少あるが、そう羅列するにも及ぶまい。

雅号

正岡子規も古く漱石と号したことがあるが、あまり使

う機会はなかった。蓋し大学予備門時代から夏目漱石と肝胆相照した為であろう。漱石も糸瓜先生と号したことがあり、初期の「ホトトギス」に「不言の言」を寄せた時はこの署名であった。「うま酒は棚に」という野間奇瓢の俳体詩を見ると、詞書に糸瓜先生とあるから、洋行後にも時にそういうことがあったのかも知れぬ。併し子規が糸瓜の句を詠んで逝いたため、その日を糸瓜忌と称し、子規の事を糸瓜仏というに至っては、糸瓜先生はいささか工合が悪い。自然消滅の形になったものと思われる。

封筒の上書

正岡子規が「病牀六尺」を毎日日本新聞社へ送るのに、封筒の上書を書くのが面倒なので、新聞社に頼んで活字で刷って貰った。百枚もあればいゝと云ったのを、三百枚刷ってくれたのに驚きながら、日課として書いて行くうちに、とうとう「病牀六尺」は百に達した。子規はそのよろこびを「病牀六尺」に書き、あと二百枚の封筒を費すには半年以上かかると云って懸念したが、遂に百二十七を以て子規の生涯は終り、「病牀六尺」は絶えてし

まった。

漱石の小説は常に机上に五六回分位出来て居っても、毎日一回分だけ送って来る。その封筒には所番地までこまかく書いてよこすので、山本笑月が気の毒に思って、今度所番地を印刷した封筒を上げましょうと云ったが、この方は実現されなかった。但漱石の場合は自分の所番地だけの意味か、宛名までを印刷することになるのか、その辺がちょっと明瞭でないけれども、この人達が封筒の上書などをいゝ加減に書かぬ消息はよくわかる。

小説の題

鷗外の翻訳「みれん」が「東京日日」に出る時、原作の題をそのまゝ訳すと「死」になる。新年早々困るから変えて貰いたいと云われて「みれん」と改めたらしい。大正四年に当時の若い作家の短篇を「東京朝日」に並べた時も、武者小路実篤のが死、野上弥生子のも死であったので、漱石が弥生子に手紙を出して、「万一都合で二つの原稿がつゞいて出るか、又は一つ二つ間を置いて出る場合には少々変ですが、何とか題の変更しやうはありませんか」と相談している。この時は新年ではなかった

けれど、新聞のような一般的なものの紙面に、死、死と続くのは面白くあるまい。単に御幣を担ぐのとは違った意味の配慮である。

小説中の人名

「吾輩は猫である」の中にバルザックが友人を連れて巴里の町をむやみに歩いた末、裁縫屋の看板にマーカスとあるのに目を付け、「これだこれだ、これに限る。マーカスの上へZといふ頭文字をつける。すると申し分のな

い名が出来る。どうも自分で作った名はうまくつけたつもりでも、何となくわざとらしいところがあつて面白くない。漸くの事で気に入つた名が出来た」と云って、これを小説中の人名に用いたという話がある。「猫」の中の人名などは皆ひねったものだが、明治四十一年に「国民新聞」から小説中の人名に就いて問われた時、漱石は次のように答えている。――場合によると、あれもいかぬ、これもいかぬで、二日も三日も考えてみることもあるが、凝っては思案に能わぬで、大抵いゝ加減につけてしまう。こういう人物にはこういう名でなければならぬ

というような、据わりのいゝ名はなかなかない。自分の子供に名をつける場合でも、やはりこれならばというような名は容易につけられぬ。この頃はなるべくわかり易い名をつけるようにしている。やかましい名より三四郎とか与次郎とか普通の名の方がいゝというのである。これは人名のみならず、小説全体の傾向の上にも云えることであろう。

三四郎

三四郎という名前は昔からあったが、一般的になったのは漱石が小説の題名に用いてからであろう。近頃は姿三四郎が相当有名になった。漱石の「三四郎」には小川三四郎、佐々木与次郎の両名が常に随伴して現れて来るが、佐々木高行侯が若い時分に三四郎と称したことを此頃気がついた。これなどは全くの偶合である。

代助、三四郎

「それから」の主人公の名は代助である。漱石の書簡によると、亡兄の幼名を代輔と云ったとあるから、その輔の字だけ変えて使ったものらしい。三四郎のモデルは小宮豊隆ということになって居るが、明治三十六年撰科卒業者の中に堀川三四郎という人があった。小川三四郎の名は或はこれを一字改めたものではあるまいか。

言葉

大正十年に出た畔柳芥舟の「世界に求むる詩観」のはしがきに「ブルジョアやプロレタリアが滑つたり転んだりして居る真最中に、不急の詮索を試みる呑気千万な奴もあればあるものだと非難されるかも知れないが」ということがある。これを読むと、漱石が芥舟に宛てた手紙に「自然主義が滑つても転んでも小生も毛頭異存無之候へども、自然主義を振り廻す人と同商買故何うでもよくなくなり候」とあったのを思い出す。滑ったり転んだりは誰でも使う平凡な言葉だから、何も一々引合に出す必

要もないようなものだが、用い場所が甚だ似ているのと、手紙を受け取った本人だけに、潜在意識に在ったのではないかという気がするのである。明治四十三年と大正十年とでは、滑ったり転んだりする内容がこれだけ違っても、格別不思議はなかろう。

鑑定

日露戦役から凱旋した東郷大将に「少年世界」が金時計を贈り、大将は「心如鉄石」の四字額を揮毫してこれ

に酬いた。その後信州松本の小学校に記念館が出来て、日露戦役の記念品が集っているのを見た巌谷小波が、この四字額を寄贈したまではよかったが、年を隔てて行って見ると、額は書風が違うから偽物らしいとの理由の下に冷遇されて居った。念のために裏を検めて貰い、寄贈当時の小波の記入によって、始めて真物に紛れなき所以を証することが出来た。

内田百閒が窮した際、王維の五言絶句を書いた漱石の一軸を金に換えなければならなくなり、先輩の紹介状とこの軸とを持たせて細君を或人の許に遣した。然るに先

方の主人は「御紹介があるから戴いては置きますが、漱石さんの物には贋物が多いのでしてね」と云い、如何にも意に満たぬ様子で金を渡してくれたそうである。この揮毫の際漱石の前に脆いて紙の端を押えていた百閒は、これを聞いて心外で堪らず、暫くたって金を調達し得るや否や、先方に持参して軸を返して貰ったと随筆に書いている。

こういう鑑定の下に贋物の仲間入りをした作品が他にもありはせぬだろうか。

理由

漱石が大連で講演を頼まれた時、別に話すこともないので、私は今晩、何故講演というものが、そう容易に出来るものでないか、即ち講演が出来ない訳を講演致します、と云って一席弁じた。中村是公がそれを聞いて、貴様はなかなか旨い、これからどこへ出て演説しようと勝手だ、と評したことがある。「東京朝日」の編輯長であった佐藤北江が亡くなって、追憶の一文を徵せられた時も、自分は佐藤君と交りが浅い、御辞儀をする位の面識があっただけである、それでも何か特色のある事を記憶

していれば、それが材料になるが、生憎そんな機会にも出会わなかった。「私は最初右の事情を述べて御詫を致さなかつた事を後悔致しますが、然し今でもまだ沈黙してゐるよりは幾分か礼儀に合ふだらうと思つて何故私が佐藤君の事を書かない、否書けないかの意味を御詫までに書きます」と申し送った。追悼録にはこの書簡が収めてあるが、漱石の書けない理由は甚だ明快である。講演の方には更に複雑な理由があったことと思う。中村是公が感心したというだけしか伝わらぬのは遺憾である。

忘却

芥川龍之介がダヌンチオの「フレーム・オフ・ライフ」の話をして傑作だと云った時、漱石はそんな本は知らないと云った。然るにその後いつも坐っている机のうしろにある本箱を振り返ったら、ちゃんとその本があるので驚いた。出して見たら或は鉛筆で評が書いてあるかも知れないが、面倒だからそのまゝにしているとある。念の為に「漱石全集」の別冊を覗いて見たが、この本の書き入れはないようであった。

女の顔

馬場孤蝶は斎藤緑雨の恋愛事件をいくつか挙げて、緑雨の関係した女の顔には一種の系統が立っている、系統でいうと、緑雨自身の顔付とやや種類を同じゅうする容貌の女だった、と云っている。そういうこともあるかも知れない。

寺田博士の書いたものによると、漱石はロゼッチの画く腺病質の美女のようなタイプは嫌いでなかった。グリューズの「破瓶」の娘の顔も好きだったらしく、ヴォラプチュアスだと評していたそうである。そうかと思うと

全くタイプの違う純日本式、下町式の顔も好きであった。グリューズの女の顔がヴォラプチュアスな表情に富んでいるということは、「三四郎」の中で美禰子の眼を説明する時に用いていたと思う。こういうことは人により立場によって異るから、一定の基準を以て臨むことは危険であろう。

題句

宮垣四海著「俳句哲学」という書物に漱石の題句があ

るという話なので、どんな句かと思っていたら、「蓮の葉に麩はとゞまりぬ鯉の色」という短冊の写真が出ているに過ぎなかった。然も角田竹冷の句と並んでいるのだから、どういう意味から云っても漱石題句とは称しがたい。もし発行当時にも漱石題句として広告されたとすれば、正に羊頭狗肉だが、古書肆の目録にあったのでは問題は自ら別である。

明治四十二年七月二十二日の漱石の日記に、宮垣四海のために短冊を二枚書くことがある。蓮の句は多分その一葉であろう。

雷の句

桜菊書院から出た「夏目漱石全集」に補遺として「雷の図にのりすぎて落にけり」という句が載って居り、傍註に「明治四十四年」として？がつけてある。併しこの句は大町桂月が「夏目漱石論」の中に引用して居る。「夏目漱石論」は「虞美人草」の連載中に発表されたのだから、どうしても明治四十年以前でなければならぬ。桂月は何でこの句を見たか、編者は何からこの句を採録したか、這間の消息はわからぬが、とにかく四十四年では工

合が悪い。

笹飴、笹餅

越後の笹飴というものは「坊つちやん」でおぼえた。漱石が修善寺を引揚げて胃腸病院へ還った頃の日記に「森成さんが越後の笹飴をくれる。雅なものなれど旨からず」と書いてあるから、「坊つちやん」の時は実際には知らなかったのかも知れぬ。森成医師はその後胃腸病院を去って越後で開業、漱石とは晩年まで交渉があった。

折々越後の名物を送って来る中に、笹飴もあれば笹餅もある。笹餅はそのまゝで一つ、砂糖を付けて二つ食べ、「大して美味とは思はれませんが、珍奇なものには相違ありません。夫から越後からきたのだから猶うまいのでせう」と率直な礼状を出した。この方は慥に初めてらしい。

腐った魚

長塚節が正岡子規のところへヤマベという魚を沢山送

ったところ、盛夏の候であったので、途中で腐って蛆が湧いてしまった。子規はこれに対し、「量は沢山ならずとも腹をあけて焼いて日に干してといふだけの手数を取てもらふとよかつた」と注意すると共に、「尤もよろしき部分少々取りて食し試み候に極めてうまく候」と申し送っている。漱石が胃腸病院に入院中、兵庫県の藤井節太郎という人から、自分で漁った鮎を小包で送って来たが、これも途中で腐ってしまった。同じく七月の事である。子規はこのヤマベのことを長歌に作り、「病牀六尺」に載せた。その終りの句に「そをやきて、うまらにくひ

ぬ、うじははへども」とある。漱石の場合は仮令腐らなかったにしても、入院中でどうもならぬ。鮎に縁のない身であるから、物質上の利害は同一だという手紙を書いている。

鳥の声

大正四年三月、京都に遊んだ漱石の日記には、いろいろ見聞が記してあるが、その中に

鳥鳴く。何ぞと聞けばチンチラデンキ皿持てこ汁の

ましよ。

という一行が目についた。同じ年に成った「道草」に「健ちやんはたしか京都へ行つた事がありますね。彼処に、ちんちらでんき皿持てこ汁飲ましよつて鳴く鳥がゐるのを御存じですか」という話があるからである。「道草」の世界は漱石が英国から帰った直後なので、大正四年より十年以上前になる。その頃実際こういう話があったのを、端なく京都で鳥の声を聞いて思い出したのか、最近得た知識を大勢に関係のない会話に用いたのか、その辺はよくわからない。

猫と犬

「吾輩は猫である、名前はまだ無い」と云って世に現れた猫は、水甕の中で往生することになっているが、実際は漱石が早稲田に移ってから、物置の古い竈の上で死ぬのである。漱石自筆の死亡通知の端書があるが、この際まで名なしであった。だから墓標にも「猫の墓」とのみあって、裏に「此の下に稲妻起る宵あらん」の句がしたゝめてある。

犬の方はヘクトーという立派な名が付いている。トロ

イの勇将の名だから立派な筈である。漱石は「それから」の中で代助の兄の家の飼犬にこの名を用いた。ヘクトーの事を書いた「硝子戸の中」に三四年の昔とあるから考えると、「それから」の方が何年か早い勘定になる。

猫

内田魯庵は文壇の愛猫家として野口寧斎と二葉亭四迷の事を「貘の舌」に書いた。饗庭篁村は猫を抱いた写真がある為に、愛猫家らしく想像されるけれども、実際は

それほどでもなかったそうだ。但彼が猫の名を付けるに当り、人の名に紛わしいものを避けた一事は、慥にこの人らしい神経を感ぜしめる。「吾輩は猫である」の著は漱石の名を天下に高からしめたが、彼は果して愛猫家であったかどうか。少くともその作品には徴すべきものがない。恐らくは「猫」の中の苦沙弥先生同様な態度を以て、飼猫に臨んで居ったのではあるまいか。不朽の名画「黒猫」を遺した菱田春草に至っては、猫ほど嫌なものはないと云っていたそうだから不思議である。

提灯胴

明治四十四年五月の漱石の日記にその四女の言葉として「支那人の子が来るのよ。名はねえ、名は提灯胴つて云ふの」ということがある。この文字は子供の発音にいゝ加減に宛てたものと思っていたら「光雲懐古談」に松本喜三郎の人形の説明をして「あの人の胴組は提灯胴といふもので、何処へ持つて行くにも縮まるやうに出来て居る。十五位の年輩の人ならその年輩丈けに寸法を極めて肋骨のやうな骨を組合せて、手や足の骨も伸縮自在であつて、一つの人形は小さい箱へ這入つてしまふやうに工

夫した」とある。漱石も子供の発音が偶然この言葉になって居るのに興味を持ったものであろう。同じ日記にもう一度提灯胴が出て来る。

少年

漱石のところへ庭先からやって来て、リーダーの読めぬところを伺いたいという少年があった。俺のところへ来ればわかると思って来たのか、当てなしに来たのかと尋ねたら、多分わかるだろうと思って来た、という返事

である。牛乳屋か何かに奉公していて、夜学に行っているのだが、欠席したところだけわからぬという話であった。二三箇月前に田舎から出て来た者だというから、向う見ずに飛び込んだのであろう。「こゝろ」を「朝日」に連載しつゝあった時、漱石に手紙をよこした少年があり、漱石はこれに対し「あの「心」といふ小説のなかにある先生といふ人はもう死んでしまひました、名前はありますがあなたが覚えても役に立たない人です、あなたは小学の六年でよくあんなものを読みますね、あれは小供がよんでためになるものぢやありませんからおよしな

さい、あなたは私の住所をだれに聞きましたか」という返事を出している。それは自発的な手紙であったかどうか。田舎には子供の名前で手紙を名家に出させ、返事を貰おうとする知慧者があるそうである。

父なき子

漱石の女の子が八つ位の学校友達を連れて来た。二人で遊んでいる所へ行って、あなたのお父さんは何をしていらっしゃるのと聞いたら、お父さんは日露戦争に出て

死んだのと唯一口答えた。「余はあとを云ふ気にならなかつた。何だか非常に痛ましい気がした」と日記に書いてある。

沼波瓊音の子の行く学校で「オ父サマ」という綴方を父兄に回覧させた中に、父親のいない悲しみを書いたのがあった。瓊音は涙を流してこの文を写し、その子の事を聞いて見たら、父の跡を逐って先月亡くなったということがわかった。これは悲しみが二重になっている。「……そうか」という外はなかったであろう。

漱石一周忌

漱石の一周忌の逮夜に門下の士が集って句を作り、これを霊前に供えた。その顔触は森田草平、鈴木三重吉、小宮豊隆、野上臼川、津田青楓、滝田樗陰、芥川龍之介、赤木百茄、内田栄造、久米三汀、林原耕三、江口渙、松浦嘉一、釈敬道、釈元成、松根東洋城の十六人。赤木百茄とあるのは赤木桁平（池崎忠孝）の事であろうか。敬道、元成の両沙門は漱石の晩年に屢々書を寄せ、遂に漱石に逢う為に東上したことがあった。別に逮夜句座として木枯の句を作って居るが、この方は作者が半減して八

人になって居る。芥川龍之介の「木枯や東京の日のありどころ」という句もその中に在る。

二倍以上

大正六年の一周忌に出した「渋柿」の「漱石忌記念号」は俳句雑誌だけに閑却され易いが、漱石文献としては注目すべきものたるを失わぬ。浜尾男や大塚博士の談話が珍であるばかりではない。頭の先から爪の先まで漱石一色で塗り潰された所に、東洋城編輯らしい特色が窺われ

るのである。この雑誌の余白に目立たぬ六号活字で「漱石全集の予約応募数は其予定を越ゆる事実に二倍以上なり」と刷ってある。「漱石全集」第一回の予約者はどの位あったか知らぬが、門下の士の予想もそれほど多くはなかったものと見える。

日本文学電子図書館

漱石覚え書

著　者：柴田宵曲
制作者：宮澤一郎
底　本：漱石覚え書
中公文庫、中央公論新社
2009年９月25日 初版発行

日本電子文学図書館